

越山若水

2021.11.20

16世紀ルネサンス期のフランス

を代表する思想家、モンテーニュ

は優れた法律家でもあり、ボルド

ー市長を務めた政治家でもあり、

人間の行動や生き方を探究する作

家でもあった▼その集大成が「エッセー(随想

録)」である。仏文学者の堀江敏幸さんによ

ると、短文が主体の断章形式だが、一語一語

かみしめるような示唆に富んだ内容が秀逸。

その中で胸にしみたのが「話し合いの方法に

ついて」だと自著「定形外郵便」(新潮社)

に書いている▼モンテーニュ曰く、話し合い

とは他者の言葉に耳を傾け、相手を信じるこ

と。信頼は人間の契約のようなもので、傲慢

さは厳しく排除される。ただ今の時代の人々

には難しい。「彼らには間違いを直す勇気が

ない。自分の間違いを直されることに耐える

勇気がない」▼誤りを指摘されたら素直にそ

れを認め、次に生かせばいい。しかし「間違

いを直す勇気がない」者たちは逆に居直り、

論点をずらしてごまかそうとする。自他の声

を聞くことを実践してきたモンテーニュは、

「信用」こそが政治家や人間として重要だと

熟知していた▼世界の大国を自任し対立を続

ける米中の首脳会談がオンライン形式ながら

実現した。衝突の回避では一致したものの、

台湾や人権問題などで中国の野心はますます

く深い溝が浮き彫りとなった。自国の主張ば

かり言い募るようでは話し合いにならない。